外出と仕事が認知症高齢者を元気に
豊かな人間関係が支える「認め合う介護」

北海道の元気！NPO訪問

35 NPO法人 在宅生活支援サービスホーム花凪

文・加藤知美

ここは、「NPO法人在宅生活支援サービスホーム花凪」が、高齢者下宿やデイサービスを次々と立ち上げたのちに、「高齢者が自分らしく生きられる居場所を」と願い、地域の溜まり場としてオープンさせたお店だ。リサイクル品や手作り品の販売をしつつ、高齢者ミニデイ、託児、喫茶、食堂、さらにはエステもやっている。下宿人や地域の認知症高齢者が安心して出かけられる場所を作りたかったそうだ。さらには、接客やラッピングを手伝ってもらい、そのうちにできることが少しずつ増えて、認知症状の緩和が見られるようになったという。理事長の木村美和子さんは、「認知症でも、密接に関われば回復する」との信念で、高齢者にとっては、出かける場所があること、役割をもつこと、評価されることが大きな意味を持つと実感している。

木村さんは帯広市出身で、十勝で福祉の仕事の経験を積んでいた。健康で仕事は順調だったが、喘息の発作が重症化して入院し、初めて介護される側となった。このとき、回復期に体を動かすと、負担を心配する看護士に制止され、手をかけすぎる介護は自信を失わせることに気づかされた。その病院のベッドの上で、介護される側とする側を固定せず、寄り添うことで、できることを増やしていく介護をするという「花凪構想」がふくらんだ。共鳴する仲間が十勝で増え、事業開始を目前にしたとき、札幌で専門誌記者をしている現在の夫と取材を通じて意気投合し、札幌に移り住む決断をした。炭鉱町生まれの夫は濃密なコミュニティの温かさをよく知り、地域で豊かな人間関係の中「なりたい自分になる」お手伝いをするNPOの立ち上げを応援し、本業の傍ら運営に関わっている。

西区平和の閑静な住宅街にある「ばりあふりーしょっぷ花凪屋」

◇ 多機能店舗を運営、温かな地域の溜まり場に

「ばりあふりーしょっぷ花凪屋」と書かれた大きなピンクの看板をくぐって足を踏み入れた。リサイクルショップだが、奥行きがあり喫茶店もある。店の一角にはミシン仕事をするお年寄りもいて、小さな子どもも遊んでいる。不思議な空間だが、温かな空気に包まれ、地名のとおり「平和」を感じた。

◇ 認知症高齢者下宿の誕生と増設の原体験

NPO法人格を二〇〇〇年暮れに取得し、最初に始めた活動は、自宅を開放してのバリアフリー居酒屋「今日だけ酒場花凪」だった。高齢者も障がいのある人も子育て中のお母さんも安心して飲める場となり、現在も月一回開催している。介護する／されるの関係を取り去って、共に過ごす場所を大事にする花凪の原点だ。

その後、訪問介護と居宅介護支援の指定を受け、介護保険事業開始の体制を整えたが、しばらくは利用者もなくのんびりしていた。そんなある日、グループホームに入居が決まっている高齢者をそれまでの一時滞在という約束で八日間引き受ける

ことになった。昼間は落ち着いていたが、夜になると徘徊したり暴力的になったりする日が続き、「しっかり向かい合って家族のように」と思って迎えた気持ちも吹っ飛んでしまった。ようやく帰宅する日になったが、突然「ここは私の家だからここにいる」と言い張り、そのまま一緒に暮らすことにした。図らずして花凪下宿の誕生となった。

やがて、口コミで一人二人と増え、木村家の三人と下宿人三人との共同生活は、個性的な認知症高齢者のエネルギーが渦巻く毎日が続いた。自然と役割分担ができるなどし、徐々に落ち着いてきたとき、一人が「ここで死にたい」と言い出した。徘徊などで手を焼いていた方からの嬉しい一言だった。看取りをして葬式を出せる家を作ろうと思い、花凪2号館下宿の建設が計画された。

建設の資金調達にあたっては、助成金や金融機関の融資を当たったが上手く行かず、候補地が見つかった時点で、必死の思いで事業計画を説明しに行った北海道労働金庫が四三〇〇万円の融資を引き受けてくれた。全国の労働金庫がNPO法人への大型融資を行った最初のケースとなった。大きな施設ではなく家族のような規模でお互いを認め合い自分らしく生きる活動をしたいという木村さんの情熱が融資担当者の心を動かした結果だった。

理事長の木村美和子さん

その後、下宿人が安心して出かけられる場所があれば、との思いから、下宿人となった人が以前住んでいた家を借り受けてデイサービスを始めた。

◇ 花凪スタイルに共鳴する仲間と共に、広がる独自事業

そして、二〇〇六年に開設したのが、冒頭の「ばりあふりーしょっぷ花凪屋」である。現在、職員数は二七名。下宿人の家族だったり、木村さんが講師をしていた専門学校の生徒だったりと、大半が「縁故採用」である。花凪の方針に共鳴する人を仲間に加えていったからだ。デイサービス施設を整備する際にボランティアで手伝ってくれた近所の人も、その行動力や心遣いが買われて職員となった。花凪屋の店長は、訪問エステで木村さんと出会ったプロのエステティシャンで、花凪の施設内でエステルームをしながら、介助や接客をこなす貴重な戦力となっている。

花凪屋で商品の整理やラッピングなどを手伝う認知症の高齢者は、症状が緩和するばかりでなく、できる仕事の範囲が広がっていったので、衣類のリメイクなどを一緒にしてもらい、給料を出すことにした。認知症の高齢者の雇用の場となっているのだ。この事業のために新たに「NPO法人ひと花」を設立し、花凪下宿人やスタッフが会員となって盛り上げ、文字通りもう一花咲かせようとしている。もらったお金でビール園に行ったりホテルのディナーショーに出かけたりして、ますます元気がついているという。

一般には、介護や福祉の職場の定着率が低いことに悩む雇用行政の関係者も多いが、木村さんは、高齢者や障がい者にもっと光をあてるべきだと考えている。「認知症の人が認知症の人を介護する仕事をしてもよいのでは」と言う。花凪のような活動が全市町村に広がれば、高齢者福祉のあり方も大きく変わるだろう。

木村さんの話には「保険外」という言葉が度々出てくる。花凪の活動には、花凪屋でのミニデイなど、介護保険適用外の事業が多いのだ。高齢者が自分らしく最期まで生きられるような福祉をやろうと思うと、必然的に介護保険外のサービスが増えるそうだ。介護の真髄は「できなくなったことをできるようにすること」と考える花凪スタイルは、介護保険制度にはすんなり収まらないようである。

3時のコーヒータイムを終えたひととき

◆ NPO法人在宅生活支援サービスホーム花凪
所在地　札幌市西区平和2条7丁目11－26
和興一ビル1階
TEL　011－666－1565
WEB　http://www13.plala.or.jp/hananagi/